

シャーデンフロイデの共有が自尊感情に及ぼす影響

渡邊ひとみ*

The Effect of Sharing a Feeling of Schadenfreude on Adolescents' Self-esteem

Hitomi WATANABE*

We sometimes experience schadenfreude, that is, a pleasure at another's misfortune. In this study, the effect of sharing a feeling of schadenfreude on adolescents' self-esteem was examined. Undergraduates were randomly assigned to the control condition ($N=87$), the unsharing condition ($N=144$), or the sharing condition ($N=147$). Participants were asked to read a scenario describing a classmate's misfortune and to imagine themselves in that situation. Subsequently, participants in the sharing condition were asked to read another scenario in which they expressed pleasure at a classmate's misfortune and their close friends agreed with them. Unexpectedly, participants in the sharing condition showed smaller positive changes in self-esteem. Because previous studies consistently showed that sharing feelings with friends and being accepted by friends have positive effects on self-esteem, the present finding indicates that adolescents do not necessarily see sharing a feeling of schadenfreude as positive peer acceptance. Since schadenfreude is socially undesirable and therefore frequently shared in only close relationships, sharing this feeling might be related to keeping secrets, which has negative effects on self-esteem.

key words: schadenfreude, self-esteem, friendships

問題と目的

自己査定や自己高揚の機能をもつ自己と他者との比較 (Bulter & Ruzany, 1993) は、日常経験するさまざまな感情を喚起させ (Smith, 2000)、時には他者の不幸に対する喜びの感情をも喚起させることがある。このように、他者もしくは他集団が不幸に見舞われることにより喚起される喜びの感情はシャーデンフロイデ (Schadenfreude) と呼ばれる (Heider, 1958)。シャーデンフロイデは、第三者や環境要因によって不幸がもたらされる場合に生じ、直接的に他者を打ち負かし、苦しめて喜ぶこととは区別される (Leach, Spears, Branscombe, & Doosje, 2003)。シャーデンフロイデは、価値を置いている領域や関心を持っている領域において、また不幸となる出来事の責任が当人にあると判断される場合において喚起されやすいな

ど、その喚起要因に関する知見が蓄積されてきている (e.g., van Dijk, Goslinga, & Ouwerkerk, 2008; van Dijk, Ouwerkerk, Goslinga, & Nieweg, 2005; Feather & Sherman, 2002; Smith, 2000)。これまでの先行研究を概観すると、シャーデンフロイデの喚起を予測する心理学的要因は以下の2点にまとめることができるだろう。

1つめの要因は、シャーデンフロイデに先立つ前提感情である。例えば、他者に羨望や嫌悪といった感情を抱いている場合には、その他者に対してシャーデンフロイデが喚起されやすい (e.g., Brigham, Kelso, Jackson, & Smith, 1997; van Dijk, Ouwerkerk, Goslinga, Nieweg, & Gallucci, 2006; Smith, Turner, Garonzik, Leach, Urch-Druskat, & Weston, 1996)。また、van Dijk et al. (2006) は、同性の他者に対してのみ、羨望がシャーデンフロイデを予測すると述べている。羨望とシャーデンフロイデとの関連を支持しない研究結果 (e.g.,

* 同志社大学心理学部

Faculty of Psychology, Doshisha University, 1-3, Tatara Miyakodani, Kyotanabe 610-0394, Japan
e-mail: hitomi_w@hotmail.com

Hareli & Weiner, 2002) もいくつか報告されているが、近年の脳科学的知見は両者の関連を支持している。Takahashi, Kato, Matsuura, Mobbs, Suhara, & Okubo (2009) は、fMRI を用いて、羨望やシャーデンフロイデと関連する脳部位を検討した。その結果、強い羨望を抱いているほど前帯状皮質の活性化が、またシャーデンフロイデを抱いているほど腹側線条体の活性化がみられた。そして、前帯状皮質と腹側線条体との間には正の相関があることが明らかとなった。このことから、羨望とシャーデンフロイデの間には関連があり、van Dijk et al. (2006) が指摘しているように、羨望の測定方法やターゲットとなる他者の特徴における差異が結果の不一致に影響している可能性が高いと考えられる。

2つめの要因は自尊感情である。澤田 (2008) は、自尊感情の高さが妬みといった感情を低下させ、その結果としてシャーデンフロイデの喚起も抑制されると述べている。また、自己評価の低下に結びつくような脅威の認識を介して、自尊感情がシャーデンフロイデに影響することも明らかとなっている (van Dijk, van Koningsbruggen, Ouwerkerk, & Wesseling, 2011)。自尊感情が低いほど、優れた他者の存在によって自己に対する脅威が引き起こされやすく、その結果、優れた他者の身に不幸が生じるとシャーデンフロイデが喚起されやすくなるのである。領域に対する関心や重要性が低い場合でも、このような脅威が認識されればシャーデンフロイデは高まるが (van Dijk, Ouwerkerk, Wesseling, & van Koningsbruggen, 2011; Leach et al., 2003)、自己肯定化の機会を与えられ、自尊感情の高低に関係なくシャーデンフロイデは弱まるようである (van Dijk, van Koningsbruggen et al., 2011)。これらの知見から、シャーデンフロイデは他者の不幸に向けられた反応であるものの、自己との関わりが深く (Leach et al., 2003)、自己評価の維持や自己高揚の働きのなかで喚起される感情であるといえる。

このような自己高揚との関わりをもつ反面、シャーデンフロイデは“こころの内だけに留められることの多い感情”として捉えられ (e.g., 澤田, 2008)、その喚起要因の検討が進められてきた。なぜなら、自分自身が他者に直接不幸をもたらすわけではなくとも、他者の不幸を喜ぶ行為は社会的に望ましいとはいえないからである。しかし、日常生活を振り

返ってみると、仲の良い友人や気の知れた仲間内で、他者の不幸を“いい気味だ”と言い合ったり、喜んだりした経験も少なからずあるだろう。では、シャーデンフロイデを他者と共有する場合としない場合とで、私たちの心理的側面になんらかの差が生じるのであろうか。シャーデンフロイデが自己評価の維持や自己高揚の働きのなかで喚起されることを踏まえると、シャーデンフロイデ喚起前と比較した場合、シャーデンフロイデ喚起後には自尊感情の高揚がみられ、とりわけシャーデンフロイデ喚起前の自己脅威的狀況下で自尊感情の低さを示した者においてはその傾向が顕著に表れると考えられる。よって、喜びの感情を理解し共感してもらうというシャーデンフロイデの他者との共有行為は、さらなる自尊感情の高揚をもたらす可能性が高いと予測される。

シャーデンフロイデの共有には、それを共有する相手の存在が必要となる。とくに青年期は、友人と過ごす時間が他のだれと過ごす時間よりも長くなり (Larson & Richards, 1991)、また同じ価値観をもつ者同士で集団を形成するようになるといわれる (Shaffer & Kipp, 2009)。よって、青年がシャーデンフロイデを共有する際の相手は、仲の良い友人であることが多いと考えられる。また、青年期には、この友人との関わりが自己の確立や自尊感情の重要な規定因となるほど大きな意味をもつようになるといわれており (Buhrmester & Furman, 1990)、両者の関連は多くの研究において報告されている (e.g., Masten, Coatsworth, Neeman, Gest, Tellegen, & Garnezy, 1995; 小塩, 1998; Richards, Crowe, Larson, & Swarr, 1998; Thomas & Daubman, 2001)。例えば、Gauze, Bukowski, Aquan-Assee, & Sippola (1996) は、青年期初期の学生を対象とし、家庭と学校における対人関係が自尊感情に及ぼす影響を検討した。その結果、良好な友人関係が自尊感情を高める効果をもつこと、また家庭環境が好ましくない場合には、友人を失う、もしくは友人関係の質の低下による自尊感情への影響がとりわけ大きいことを明らかにした。また、性差もみられており、女性においては友人からの承認と自尊感情が強く関連していることも示されている (Thorne & Michaelieu, 1996)。

他者との深い関係を回避する青年が増え (岡田, 1995, 2007)、友人関係の希薄化が報告されるようになった今日においても、友人関係がもつ機能そのも

のは以前と変わっていないといわれている (岡田, 2007)。岡田 (2007) は、従来どおりの内面的な友人関係を築いている青年は、友人から受容されていると感じ、自尊感情も高く、適応的な特徴をもつと述べている。さらに、岡田 (2011) によると、高校生および大学生の友人関係は、従来の青年観に合致する“内面関係群”に加え、現代的友人関係にあたる“関係回避群”および“気遣い・群れ群”の3群に分類される。関係回避群は、他者を傷付けないための配慮をしないことから受容されず、排除されるのを回避する目的から内面的関係を避け、その結果、低い自尊感情を特徴とする群である。一方、気遣い・群れ群は、お互いに気を遣うことで他者からの受容感を得ているため、友人間で気を遣うという関係が自尊感情の高揚や維持といった肯定的役割を果たしている群である。これら2群の特徴をみると、不安回避や自己防衛のために従来とは異なる友人との関わり方をしているものの、友人関係そのものを不要としているわけではなく、友人からの受容を求める姿も依然としてうかがえる。よって、岡田 (2007) の主張するように、友人関係の機能そのものが変化していないのであれば、友人関係の中で仲間を受容されることが自尊感情を高める働きをもつという点は、現代的友人関係を築いている青年にとっても同じであるといえる。

さらに、高坂・池田・葉山・佐藤 (2010) は、友人関係の中で共有している対象と心理的機能との関連を検討し、喜びや悲しみといった“気持ち”の共有は、友人間の結びつきを強め、“共有していることで前向きになれる”といった動機づけの向上や、楽しさの増大といったポジティブな機能とも関連があることを報告している。また、このような心理的な共有は、ネガティブな機能をもたないとも述べている (高坂他, 2010)。したがって、友人関係の中でシャーデンフロイデを共有し、受容してもらうことも自尊感情の高揚をもたらすと予測される。

以上の議論を踏まえ、大学生サンプルを対象として、シャーデンフロイデを友人と共有するか否かにより、自尊感情にどのような差がみられるのかを検討する。本研究では、シャーデンフロイデを共有する友人がいる場合は、共有する友人がいない場合と比べ、他者の不幸後にみられる自尊感情の高揚の程度が大きいと予測した。また、女性においては友人

からの承認と自尊感情が強く関連していることから、共有者の有無による差異は女性において大きいと予測した。

方 法

調査参加者

大学生 380 名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は授業中に配布し、その場で回答してもらい回収した。また、データの処理方法に同意したうえで回答してもらい、回答したくない項目には回答する必要はないという選択肢がある状況下で回答してもらった。回答を得られた 380 名のうち、質問紙の回答に不備のなかった 378 名 (男性 183 名、女性 195 名、 $M=19.16$ 歳、 $SD=1.60$ 歳) を分析対象とした。調査は 2012 年 7 月に実施した。

質問紙の構成

架空シナリオ Hareli & Weiner (2002) を参考に「実験シナリオ」を作成し、奨学金の返還免除生を決定する場面を回答者に提示した。実験シナリオは 3 部構成となっており、第 1 部では多額の奨学金を借りているという設定の回答者が不利となり、羨望の感情が喚起される状況が描かれていた。具体的には、回答者より成績の良い同級生の A さんも奨学金返還免除生の枠 (1 名) に応募しており、指導教員は面接実施前から、同級生の A さんのほうが返還免除生に選出される可能性が高いと述べている、といった主旨の内容であった。続く第 2 部では、同級生の A さんが面接で失敗してしまい、返還免除生に選出される可能性が低くなる、といった内容で、有利な立場にあった他者が不幸に見舞われる状況が描かれていた。第 3 部は、回答者が A さんの不幸に対する正直な喜びの気持ちを仲の良い友人に伝え、それに賛同してもらう場面が描かれていた。シャーデンフロイデは、異性よりも同性の他者 (van Dijk et al., 2006) に対して、また友人や同僚といった身近な関係にある他者 (Hareli & Weiner, 2002) に対して喚起されやすいとの先行研究を踏まえ、シナリオ内の不幸に見舞われた他者は回答者と同性の同級生とした。

また、上述の実験シナリオによって、予想したとおりの羨望感情やシャーデンフロイデが喚起されるかどうかを確認するため、「統制シナリオ」をもう 1 種類用意した。統制シナリオの第 1 部では、回答

者と同級生のAさんが必修科目の学期末レポートを提出する、といった学校での一場面が描かれていた。また第2部では、Aさんのレポート成績が芳しくなく、必修科目の単位を落とす、といった不幸場面が描かれていた。なお、統制シナリオは実験シナリオの操作チェックの目的で使用したため、第3部の共有シナリオは含まれていなかった。

シャーデンフロイデ 他者の不幸に対する感情尺度(澤田, 2008)を使用した。本尺度は、シャーデンフロイデ(“楽しい”“ゆかいだ”“満足だ”“おもしろい”“笑える”“うれしい”“いい気味だ”の7項目)と、同情(“つらい”“悲しい”“残念だ”“苦しい”“かわいそうだ”“気の毒だ”の6項目)の2つの下位尺度から構成されていた。調査参加者には、シナリオで提示された他者の不幸に対する感情として各項目にどの程度あてはまるかを6件法(6=非常にそう思う, 5=そう思う, 4=ややそう思う, 3=ややそう思わない, 2=そう思わない, 1=全くそう思わない)で評定してもらった。なお、本研究の分析では、シャーデンフロイデ得点(下位尺度項目の平均値)のみを用いた。本研究における当該尺度の α 係数は.86であった。

自尊感情 状態自尊感情を測定するため、阿部・今野(2007)の状態自尊感情尺度を使用した。状態自尊感情尺度は、Rosenberg(1965)の10項目から成る自尊感情尺度の邦訳版(山本・松井・山成, 1982)を一部改編したもので、“いま”という表現を用いることで測定時の自尊感情を測定する尺度である。各項目(9項目)に当てはまる程度を5件法(5=あてはまる, 4=どちらかというにあてはまる, 3=どちらともいえない, 2=どちらかというにあてはまらない, 1=あてはまらない)で評定してもらい、全項目の合計点を自尊感情得点とした。本研究における当該尺度の α 係数は.87であった。

手続き

調査参加者を統制群(男性45名, 女性42名)、共有者あり群(男性68名, 女性79名)、共有者なし群(男性70名, 女性74名)の3群にランダムに振り分けた。まず、統制群には統制シナリオの第1部を、共有者あり群と共有者なし群には実験シナリオの第1部を読んでもらい、“同級生のAさんに対してどの程度羨望の感情を抱きましたか”という問いに対して7件法(7=非常に当てはまる, 6=当ては

まる, 5=やや当てはまる, 4=どちらともいえない, 3=やや当てはまらない, 2=当てはまらない, 1=全く当てはまらない)で評定してもらった。また、各シナリオ状況下にあると想像してもらったうえで、状態自尊感情尺度の項目を評定してもらった。

その後、統制群には統制シナリオの第2部を、共有者あり群と共有者なし群には実験シナリオの第2部を読んでもらい、不幸に見舞われた同級生のAさんに対するシャーデンフロイデの程度を測定した。

シャーデンフロイデの測定後、共有者あり群にのみ、実験シナリオの第3部(Aさんの不幸を喜ぶ気持ちを仲の良い友人と共有し、賛同してもらう場面)を読んでもらい、その状況下での状態自尊感情を再度評定してもらった。一方、共有者なし群には、実験シナリオの第2部を読んだ後、そのまま第3部を読まずに状態自尊感情尺度の項目を評定してもらった。また、統制群についても、統制シナリオの第2部を読んだ後、そのまま状態自尊感情尺度の項目を評定してもらい、調査を終了した。

結 果

シナリオ操作の確認

まず、統制群には統制シナリオの第1部の場面において、また共有者あり群および共有者なし群には実験シナリオの第1部の場面において、同級生のAさんに対して喚起された羨望感情の程度を評定してもらった。その結果、羨望感情得点の平均値は、統制群が2.93($SD=1.66$)、共有者あり群が5.89($SD=1.12$)、共有者なし群が5.92($SD=1.03$)であった。羨望感情得点に群による差があるかどうかを確認するため、群を要因とした1要因分散分析を行ったところ、群の主効果が有意であり($F(2, 375)=256.47, p<.001$)、TukeyのHSD検定による多重比較の結果、統制群よりも共有者あり群および共有者なし群の羨望感情得点が有意に高かった。

また、各シナリオの第2部の場面(同級生のAさんが不幸に見舞われる場面)において、Aさんに対するシャーデンフロイデの程度を評定してもらった。その結果、シャーデンフロイデ得点の平均値は、統制群が2.11($SD=0.09$)、共有者あり群が2.62($SD=1.09$)、共有者なし群が2.68($SD=1.09$)であった。シャーデンフロイデ得点に群による差があるか

どうかを確認するため、群を要因とした1要因分散分析を行ったところ、群の主効果が有意であり ($F(2, 375)=17.33, p<.001$), TukeyのHSD検定による多重比較の結果、統制群よりも共有者あり群および共有者なし群のシャーデンフロイデ得点が有意に高かった。このことから、実験シナリオは統制シナリオよりも高い羨望感情およびシャーデンフロイデを喚起していることが確認された。

シャーデンフロイデと自尊感情との関連

シャーデンフロイデと自尊感情との関連をもとに予測した、シャーデンフロイデ喚起前後における自尊感情の変化を調べた。具体的には、シャーデンフロイデが自己評価の維持や自己高揚の働きの中かで喚起されるとの知見を踏まえ、(1)シャーデンフロイデ喚起前と比較した場合、シャーデンフロイデ喚起後には自尊感情の高揚がみられ、(2)自己が不利となる自己脅威状況下で自尊感情の低さを示す者は、シャーデンフロイデ喚起後に自尊感情のより大きな高揚を示す、と予測した。

自尊感情における群分けは、実験シナリオの第1部の場面(回答者が不利な状況に置かれた場面)で測定された、共有者あり群および共有者なし群の状態自尊感情得点の平均値27.87 ($SD=6.84$)を基準とし、平均値以上を「高群」、平均値未満を「低群」とした。さらに、共有者あり群に分類された調査参加者は実験シナリオの第3部(共有シナリオ)を読んだ後に、また共有者なし群と統制群は各シナリオの第2部(不幸シナリオ)を読んだ後に状態自尊感情の測定を行っているため、群により状態自尊感情の測定時期が統一されていなかった。そこで、測定時期を統一する目的で、高群低群ともに、共有シナリオを読まなかった参加者のみを分析対象とし、統制群も含めたうえで状態自尊感情得点の比較を行った。各群のシャーデンフロイデ喚起前における状態自尊感情得点は、統制群(87名)が32.89 ($SD=7.59$)、高群(75名)が33.04 ($SD=3.60$)、低群(69名)が21.36 ($SD=4.52$)であり、シャーデンフロイデ喚起後における状態自尊感情得点は統制群が33.03 ($SD=7.66$)、高群が34.89 ($SD=4.64$)、低群が27.10 ($SD=5.79$)であった(Figure 1)。

群(3:統制群, 高群, 低群)×測定時期(2:シャーデンフロイデ喚起前, 喚起後)を要因とする2要因分散分析を行った結果、群($F(2, 228)=63.92, p<$

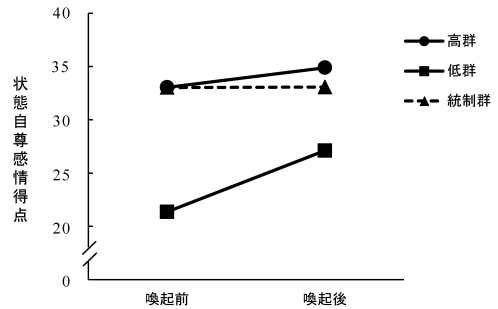


Figure 1 群別にみたシャーデンフロイデ喚起前後における状態自尊感情得点の変化

.001), および測定時期 ($F(1, 228)=115.70, p<.001$) の主効果が有意であり、交互作用も有意であった ($F(2, 228)=47.26, p<.001$)。群×測定時期の交互作用について、測定時期の単純主効果検定を行ったところ、高群 ($F(1, 228)=19.65, p<.001$)、および低群 ($F(1, 228)=173.32, p<.001$) が有意であり、シャーデンフロイデ喚起前よりも喚起後において状態自尊感情得点が高かった。また、群の単純主効果検定を行ったところ、シャーデンフロイデ喚起前 ($F(2, 228)=242.76, p<.001$) および喚起後 ($F(2, 228)=198.15, p<.001$) が有意であり、シャーデンフロイデ喚起前は高群および統制群よりも低群の状態自尊感情得点が低く、喚起後は高群、統制群、低群の順に高い値を示した。

さらに、シャーデンフロイデ喚起前後における得点変化量に3群間で差があるかどうかを調べるため、群を要因とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果 ($F(2, 228)=47.26, p<.001$) が有意であった。TukeyのHSD検定による多重比較の結果、すべての群間において有意差がみられ、低群、高群、統制群の順に得点変化量が大きかった。

シャーデンフロイデの共有者の有無による差異

シャーデンフロイデの共有者の有無および性別ごとに、羨望感情得点、状態自尊感情得点、シャーデンフロイデ得点の平均値および標準偏差を算出した(Table 1)。

まず、共有者出現前の段階において、各変数に2群間で差がないことを確認するため、羨望感情得点、シャーデンフロイデ喚起前の状態自尊感情得点、およびシャーデンフロイデ得点に対し、共有者の有無(2:あり群, なし群)×性別(2:女性, 男性)を要因とする2要因分散分析を行った。その結果、

Table 1 シャーデンフロイデの共有者の有無および性別ごとにみた各得点の平均値 (SD)

	共有者あり群		共有者なし群	
	男性 (N=68)	女性 (N=79)	男性 (N=70)	女性 (N=74)
羨望感情	16.15 (0.86)	15.59 (1.31)	15.96 (1.00)	15.89 (1.06)
状態自尊感情 (シャーデンフロイデ喚起前)	28.85 (6.34)	27.81 (6.74)	29.16 (6.48)	27.52 (7.36)
シャーデンフロイデ	22.87 (1.25)	12.40 (0.89)	12.83 (1.22)	12.53 (0.93)
状態自尊感情 (シャーデンフロイデ喚起後)	31.55 (6.73)	29.99 (6.46)	34.19 (5.79)	29.38 (6.69)

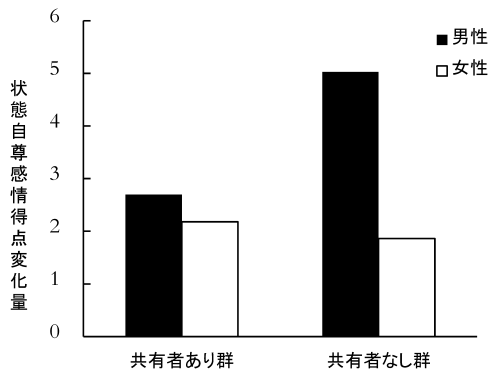


Figure 2 共有者の有無および性別ごとにみた状態自尊感情得点変化量

羨望感情得点 ($F(1, 287)=7.37, p<.05$), シャーデンフロイデ喚起前の状態自尊感情得点 ($F(1, 287)=7.61, p<.01$), シャーデンフロイデ得点 ($F(1, 287)=9.39, p<.01$) のすべてにおいて性別の主効果のみが有意であり, 群による差はないことが確認された。

シャーデンフロイデを共有する他者の存在によって, シャーデンフロイデ喚起前後における自尊感情得点の変化量(喚起後の状態自尊感情得点から喚起前の状態自尊感情得点を減算)に差がみられるかどうかを検討するため, 共有者の有無×性別を要因とする2要因分散分析を行った (Figure 2)。その結果, 性別の主効果 ($F(1, 287)=7.70, p<.05$) と交互作用 ($F(1, 287)=4.32, p<.05$) が有意であった。共有者の有無×性別の交互作用について単純主効果検定を行ったところ, 共有者の有無の単純主効果は, 男性 ($F(1, 287)=5.33, p<.05$) において有意であり, 共有者なし群の自尊感情得点の変化量が共有者あり群の変化量よりも大きかった。また, 性別の単純主効果は, 共有者なし群 ($F(1, 287)=11.68, p<.001$) において有意であり, 男性の得点変化量が女性の得点変化量よりも大きかった。

考 察

本研究では, シャーデンフロイデ喚起前と比較した場合, シャーデンフロイデ喚起後に自尊感情の高揚がみられ, また自己が不利となる状況下で自尊感情の低さを示した者がより大きな高揚を示すと予測した。回答者が不利となる自己脅威状況下で測定された状態自尊感情得点をもとに高群・低群の2群に分類し, 統制群との3群比較を行った。その結果, シャーデンフロイデ喚起前の自己脅威状況下においては, 高群と統制群の状態自尊感情得点に有意差はみられなかったことから, 本研究における高群は“優れた他者の存在があっても自尊感情が高い者”というよりはむしろ, “優れた他者の存在があっても状態自尊感情が低下しない者”と解釈される。また, 統制群においては, シャーデンフロイデ喚起前から喚起後にかけて状態自尊感情得点の上昇がみられなかったものの, 高群・低群の2群においては得点の有意な上昇がみられ, さらに状態自尊感情得点の変化量は低群において大きかった。したがって, 状態自尊感情の高低に関わらず, シャーデンフロイデは自己評価の維持や自己高揚といった働きを有しており, また優れた他者の存在により状態自尊感情の低下が引き起こされた場合には, シャーデンフロイデ喚起後にみられる状態自尊感情の高揚がより大きなものとなることを本結果は示している。この高揚は一時的なものであると予測されるが, シャーデンフロイデ喚起後の自尊感情に焦点を当てた研究はこれまでなかったため, シャーデンフロイデ喚起後の変化から自己評価の維持や自己高揚との関連を改めて示したという意味で重要な結果であるといえるだろう。しかし, シャーデンフロイデ喚起後にみられたこの高揚が, 状態自尊感情が低下する以前のレベルに回復しただけのものなのか, もしくは一時的

に以前のレベルを上回って高くなったのかについては本研究では明らかとなっていないため、さらなる検討が望まれる。

本研究では、青年期特有の友人関係と自尊感情との関連を踏まえ、シャーデンフロイデの共有行為が状態自尊感情に対してどのような効果をもつのかを検討した。シャーデンフロイデを共有する友人がいる場合は状態自尊感情のさらなる高揚がみられ、また女性は友人からの承認が自尊感情に強く影響することから (Thorne & Michaelieu, 1996)、共有者の有無による差異は女性において大きいと予測した。分析の結果、上記仮説は支持されず、共有者の有無による差異は男性においてのみみられ、共有者なし群の得点変化量は共有者あり群よりも大きいことが示された。Buhrmester & Furman (1990) や Thomas & Daubman (2001) は、友人からの受容は自尊感情を高める効果をもつと述べている。よって本結果は、シャーデンフロイデの共有行為が必ずしも友人からの受容として解釈されているわけではないことを示唆している。本研究では、シャーデンフロイデの共有行為として、他者の不幸を喜ぶ気持ちを友人が理解し、賛同してくれる場面が提示された。しかし、このような共有行為は、青年にとって、自分自身の“価値”を認め、仲間に受容してもらうことは必ずしも同義ではないのだろう。また、本研究で用いたシナリオは、羨望のターゲットとなる人物 (同級生の A さん) が不幸に見舞われることによりシャーデンフロイデが喚起される内容であったが、不幸となる出来事の責任がターゲット当人にあったわけではなかった。Gauze et al. (1996) は、友人関係の質、つまり友人がいればどのような関係でも良いというわけではなく、互恵性を有する“良好な”友人関係が自尊感情を高める効果をもつと述べている。本研究では、不幸の相応性が低いターゲットを用いたことにより、シャーデンフロイデの共有行為が“なにも悪いことをしていない他者の不幸を友人と喜ぶ行為”とみなされ、良好な友人関係を象徴するものでなかった可能性も考えられる。これらの可能性と仮説の不支持との関連を検証するため、今後は不幸の相応性が高いターゲットを取り入れるなど、羨望のターゲットとなる人物の特徴を操作し、共有する友人との関係性も考慮に入れたうえで共有の効果を検討する必要があるだろう。

最後に、男性においてのみ共有者の有無による差がみられた点について考察する。先行研究 (澤田, 2008) や本研究結果から、シャーデンフロイデ得点は女性よりも男性において高いことが示されている。また本研究では、羨望感情得点も男性において有意に高く、シャーデンフロイデ喚起前から喚起後にかけての自尊感情得点の変化量も男性において大きいことが示された。よって、男性はシャーデンフロイデを共有する相手がおらず、自分のこころの内だけで他者の不幸を喜ぶ場合に状態自尊感情の高揚の程度が大きくなると考えるよりは、シャーデンフロイデを共有する場合に高揚の程度が小さくなると考えるのが妥当である。では、男性において、なぜこのような特徴がみられたのだろうか。

友人間で何かを共有することはその関係の親密化を促進する。共有するものが“気持ち”である場合には、友人間の結びつきは強まり、動機づけの向上や楽しさの増大がみられる (高坂他, 2010)。そして、気持ちや目標など、いわゆる心理的な共有は、ポジティブな心理的機能のみを有することが明らかとなっている (高坂他, 2010)。しかし、友人間で共有されるものが“秘密”である場合には、ポジティブな機能に加え、負担感の増加といったネガティブな機能を有することも確認されている (高坂他, 2010)。例えば、茨木・余語・橋本 (2004) は、ネガティブな秘密を保持している場合には、頭痛や疲労感などの身体的症状に加え、不安感やうつ傾向がみられることを明らかにしている。また、男性の場合はネガティブな秘密を保持することと身体的症状やうつ傾向が関連しているが、女性においてはこのような特徴は認められないようである (茨木他, 2004)。シャーデンフロイデは社会的に望ましい感情とはいえ、よって気心の知れた親しい仲間内で共有されることの多い感情である。したがって、その共有行為には気持ちだけでなく、“ここだけの話”といった秘密性が含まれる可能性が高い。またその場合、シャーデンフロイデ自体の性質から、ネガティブな秘密として捉えられることも十分考えられ、よってネガティブな秘密を共有した場合と類似した性別による特徴がみられたのではないだろうか。今後は、シャーデンフロイデの共有が具体的に何を共有する行為なのかといった点を明らかにしたうえで、共有の効果を検討する必要があるだろう。

本研究では、シャーデンフロイデが自己評価の維持や自己高揚と関連する感情であることが示される一方で、その共有行為には自尊感情の高揚を促進する大きな効果はないことが示された。今後はターゲットとなる他者の特徴を操作することで、シャーデンフロイデの共有がどのような意味をもつ行為なのかを明らかにしていく必要がある。また、シャーデンフロイデ研究に共通する課題として、その測定法の改善も挙げられる。シャーデンフロイデは社会的に好ましい感情ではないため、質問紙項目への回答が歪められ、実際に経験しているシャーデンフロイデの程度が適切に反映されないことも多い。今後は、質問紙による測定だけでなく、実験的な場面の設定など、回答者が社会的望ましさに左右されないような工夫が必要である。また、共有行為についても、シナリオによる想起だけでなく、実在の人物と直接的に共有行為を取ってもらうなど、より現実に即したかたちで検討を進める必要があるだろう。さらに近年では、シャーデンフロイデがいじめの加害傾向を高める(澤田, 2011)など、社会問題との関連も指摘されている。よって、羨望だけでなく、“嫌悪”といった前提感情を仮定したうえで、シャーデンフロイデの共有の効果を検討することも今後の重要な課題であるといえるだろう。

引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 2007 状態自尊感情尺度の開発
パーソナリティ研究, **16**, 36-46.
- Brigham, N. L., Kelso, K. A., Jackson, M. A., & Smith, R. H. 1997 The roles of invidious comparisons and deservingness in sympathy and schadenfreude. *Basic and Applied Social Psychology*, **19**, 363-380.
- Buhrmester, D., & Furman, W. 1990 Perceptions of sibling relationships during middle childhood and adolescence. *Child Development*, **61**, 1387-1398.
- Butler, R., & Ruzany, N. 1993 Age and socialization effects on the development of social comparison motives and normative ability assessment in kibbutz and urban children. *Child Development*, **64**, 532-543.
- van Dijk, W. W., Goslinga, S., & Ouwerkerk, J. W. 2008 Impact of responsibility for a misfortune on schadenfreude and sympathy: Further evidence. *The Journal of Social Psychology*, **148**, 631-636.
- van Dijk, W. W., van Koningsbruggen, G. M., Ouwerkerk, J. W., & Wesseling, Y. M. 2011 Self-esteem, self-affirmation, and schadenfreude. *Emotion*, **11**, 1445-1449.
- van Dijk, W. W., Ouwerkerk, J. W., Goslinga, S., & Nieweg, M. 2005 Deservingness and schadenfreude. *Cognition and Emotion*, **19**, 933-939.
- van Dijk, W. W., Ouwerkerk, J. W., Goslinga, S., Nieweg, M., & Gallucci, M. 2006 When people fall from grace: Reconsidering the role of envy in schadenfreude. *Emotion*, **6**, 156-160.
- van Dijk, W. W., Ouwerkerk, J. W., Wesseling, Y. M., & van Koningsbruggen, G. M. 2011 Towards understanding pleasure at the misfortunes of others: The impact of self-evaluation threat on schadenfreude. *Cognition and Emotion*, **25**, 360-368.
- Feather, N. T., & Sherman, R. 2002 Envy, resentment, schadenfreude, and sympathy: Reactions to deserved and undeserved achievement and subsequent failure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 953-961.
- Gauze, C., Bukowski, W. M., Aquan-Assee, J., & Sippola, L. K. 1996 Interactions between family environment and friendship and associations with self-perceived well-being during early adolescence. *Child Development*, **67**, 2201-2216.
- Hareli, S., & Weiner, B. 2002 Dislike and envy as antecedents of pleasure at another's misfortune. *Motivation and Emotion*, **26**, 257-277.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- 茨木友子・余語真夫・橋本 幸 2004 大学生におけるネガティブな秘密の保持とパーソナリティおよび精神的健康の検討 同志社心理, **51**, 10-16.
- 高坂康雅・池田幸恭・葉山大地・佐藤有耕 2010 中学生の友人関係における共有している対象と心理的機能との関連 青年心理学研究, **22**, 1-16.
- Larson, R. W., & Richards, M. H. 1991 Daily companionship in late childhood and early adolescence: Changing developmental contexts. *Child Development*, **62**, 284-300.
- Leach, C. W., Spears, R., Branscombe, N. R., & Doosje, B. 2003 Malicious pleasure: Schadenfreude at the suffering of another group. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 932-943.
- Masten, A. S., Coatsworth, J. D., Neeman, J., Gest, S. D., Tellegen, A., & Garmezy, N. 1995 The structure and coherence of competence from childhood through adolescence. *Child Development*, **66**, 1635-1659.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 岡田 努 2007 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, **15**, 135-148.
- 岡田 努 2011 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究, **20**, 11-20.

- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- Richards, M. H., Crowe, P. A., Larson, R., & Swarr, A. 1998 Developmental patterns and gender differences in the experience of peer companionship during adolescence. *Child Development*, **69**, 154-163.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 澤田匡人 2008 シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響—罪悪感, 自尊感情, 自己愛に着目して— 感情心理学研究, **16**, 36-48.
- 澤田匡人 2011 いじめを哀れむ児童・いじめに興じる生徒—シャーデンフロイデと同情から見たいじめ目撃者の類型化の試み— 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 18.
- Shaffer, D. R., & Kipp, K. 2009 *Developmental Psychology: Childhood and Adolescence*. Belmont, CA: Wadsworth.
- Smith, R. H. 2000 Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparisons. In Suls, J., & Wheeler, L. (Eds.), *Handbook of Social Comparison: Theory and Research*. New York: Kluwer/Plenum, pp.173-200.
- Smith, R. H., Turner, T. J., Garonzik, R., Leach, C. W., Urch-Druskat, V., & Weston, C. M. 1996 Envy and schadenfreude. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 158-168.
- Takahasi, H., Kato, M., Matsuura, M., Mobbs, D., Suhara, T., & Okubo, Y. 2009 When your gain is my pain and your pain is my gain: Neural correlates of envy and schadenfreude. *Science*, **323**, 937-939.
- Thomas, J. J., & Daubman, K. A. 2001 The relationship between friendship quality and self-esteem in adolescent girls and boys. *Sex Roles*, **45**, 53-65.
- Thorne, A., & Michaelieu, Q. 1996 Situating adolescent gender and self-esteem with personal memories. *Child Development*, **67**, 1374-1390.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

(受稿: 2013.8.26; 受理: 2014.3.11)